

派遣者番号	管R7K03	氏名	千原 亮兵
研究主題 —副主題—	「永続的理解」の言語化を支援するワークの開発とその効果の検証 —「逆向き設計」論に基づく授業設計の実現に向けて—		
派遣先大学	玉川大学 教職大学院	指導担当者	今井 勉
所属	世田谷区立烏山中学校	所属長	大友 文敬

キーワード：逆向き設計、永続的理解、コンテンツベース、コンピテンシーベース、本時主義、単元主義

要旨：本研究の目的は、「逆向き設計」論の教育現場への実装に向けた、「永続的理解」の言語化を支援するための「ワーク」の開発とその有効性を検証することである。

具体的には、知の構造のフレームワークをベースにしたワークシートを作成し、そこからその単元で生徒が真に理解すべき「永続的理解」を言語化したうえで授業設計を行うワークを作成し、4人の教員に対してワークを実施した。ワークを通して明確になった「永続的理解」を意識して授業設計を行い、実際に授業を実施した。その効果の検証を半構造化インタビュー、オープンコーディング、カテゴリー化、ストーリーラインの作成から行った。

分析の結果から、研究対象教員、4人全員が「永続的理解」の言語化を行うことができた。「コンテンツベースの授業設計」から「コンピテンシーベースの授業設計」へ、「本時主義的な授業観」から「単元主義的な授業観」への変容をみとることができた。

1. 研究の背景と目的

次期学習指導要領において「高次の資質・能力」の育成が求められる中、学校現場では依然として教科内容の網羅や知識の定着を重視する「コンテンツベース」の授業観や、一時間ごとに内容の網羅を目指す「本時主義」からの脱却が課題となっている。この解決策として、ウィギンズとマクタイらが提唱する「逆向き設計 (Backward Design)」論が注目されているが、その設計の第一段階である「永続的理解 (Enduring Understanding)」の看破は熟達した専門性を要するため、多くの教員にとって実践上の高いハードルとなっていた。

そこで本研究では、教員が教科の知識構造を可視化し、「永続的理解」の言語化を支援するための「ワーク」を開発し、その有効性を検証することを目的とした。具体的には、概念マップを用いて単元内の知識・技能の関係性を構造的に捉え直し、そこからその単元で生徒が真に理解すべき「永続的理解」を言語化した。また生徒が「永続的理解」に至るための本質的な問い、パフォーマンス課題、ルーブリックを作成する一連のプロセスをワークショップ形式で実施するものである。

2. 研究の方法

(1) 研究的枠組み

「逆向き設計」論の有効性を理論基盤とし、「永続的理解」の看破・言語化を目指すワークを作成し、その有効性を、半構造化インタビューをもとにした質的な分析により検証した。

(2) 調査対象

調査では、公立中学校の教諭 4 名 (国語科 1 名、英語科 2 名、理科 1 名) を対象に、筆者が以前勤務していた中学校の同僚から、意図的サンプリングにより抽出した。

(3) 調査時期

ワーク実施期間：2025 年 8 月中旬～下旬

授業実施期間：2025 年 9 月中旬～11 月下旬

事後インタビュー：2025 年 10 月中旬～11 月下旬

(4) 調査の方法

【ワークの内容】

「逆向き設計」論を教育現場で実践的に活用するために、「知の構造 (図 1)」に基づき、単元内容を構造的に整理し、「永続的理解」を明確化するためのワークを開発した (図 2)。

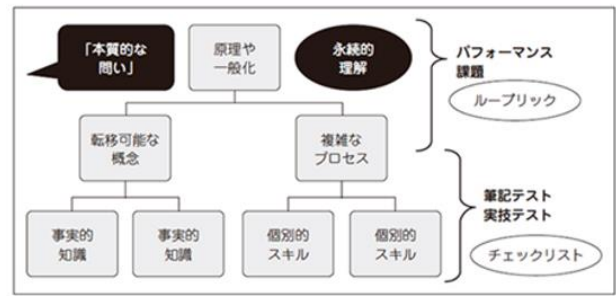


図1 「知の構造」と評価方法・評価基準の対応 西岡加名恵、石井英真 (2018)

本ワークの目的は、教員が個別的な知識・技能を構造化し、単元内での関係性を俯瞰的にとらえることで、教科の特質に応じた見方・考え方を意識的に働かせながら、単元で求められている「永続的理解」を指導者である教員が明確に言語化することで、理解の証拠となる「本質的な問い」を自ら導き出すことにある。

最終的には、導き出された「本質的な問い」に対応するパフォーマンス課題およびルーブリックを設計するまでをワークの一連のプロセスとする。

永続的理解を明確にするためのワーク (シート) (資料 1-1)		
単元名	学年	授業時数 (時間)
探究: 単元の目的を確立する		
①-1 事実に基づく知識	①-2 個別スキル	
②-1 転移可能な概念	②-2 複雑なプロセス	
③ 「原理や一般化」についての永続的理解		
④ 「原理や一般化」についての永続的理解 に基づく「本質的な問い」を設計する。		
⑤ 「本質的な問い」に対応する『パフォーマンス課題』の設計		
Goal (目標):		
Role (役割):		
Audience (観客):		
Situation (状況):		
Product/Performance (作品):		
Standards (評価基準):		

図2 「永続的理解」を明確化するためのワーク

ワークは以下の 6 つのステップで構成される。

- 1: 「事実に基づく知識」「個別スキル」の抽出
- 2: 「転移可能な概念」「複雑なプロセス」の明確化
- 3: 「永続的理解」の看破
- 4: 「本質的な問い」の設定
- 5: パフォーマンス課題の設計
- 6: ルーブリックの作成

本研究では、ステップ 3 の『「永続的理解」の看破』に至ることを主たる目的としている。そのために、ステップ 1 で教科書や資料集から抽出した「事実に基づく知識」「個別スキル」を基にステップ 2 で抽象化、さらにステップ 3 で単元における「永続的理解」の看破を目指す。

その際に自らの理解の外化を図り、単元を俯瞰してとらえることができることを目指し、概念マップ (図 3) を作成した。

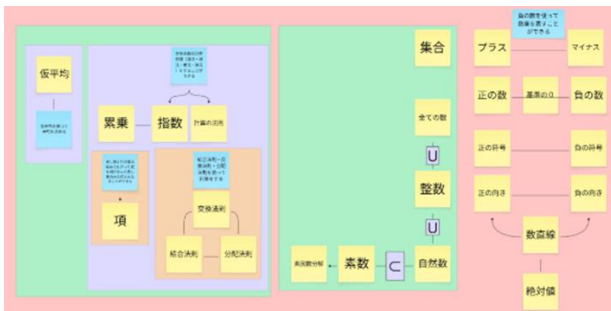


図3 単元における概念マップ

【ワークの効果の分析】

分析の手順は以下の6つのステップで行った。

- ①半構造化インタビュー
- ②オープンコーディング（インタビュー内容をコード化）
- ③カテゴリー化（コードを8つのカテゴリーに分類）
- ④ストーリーラインの作成（個別のストーリーライン）
- ⑤ストーリーラインを基に4人の個別分析
- ⑥ストーリーラインを基に4人の比較分析

3. 研究結果と分析と考察

分析の結果を個別分析、比較分析の両面から分析・考察を行った。

【個別分析から】

本研究の分析より、ワークを通じた「永続的理解」の言語化は、教員に以下の二点において質的な変容をもたらしたことが明らかになった。

第一に「授業設計」においては、従来の教科書消化型の「コンテンツベース」から、資質・能力の育成を起点とする「コンピテンシーベース」への転換が見られた。永続的理解が単元の核となり、目標・評価・活動が一貫した論理的な構造を持つ設計へと深化した。

第二に「授業観」においては、目の前の活動の成否に固執する「本時主義」から脱却し、単元全体を見通す「単元主義」への視座の拡張が確認された。教材や活動を「理解のための手段」として捉え直すことで、教員は俯瞰的な視点から学習をマネジメントする姿勢を獲得したといえる。

【比較分析から】

対象教員4名の比較分析より、本ワークの有効性には共通する変容と、差異の両面が確認された。

共通点として、教科や経験年数を問わず、全員が「永続的理解」の言語化に成功し、授業観の転換を果たしたことは、本手法が汎用的な思考の足場かけとして機能することを示唆している。

差異としては、教科特性と経験年数の影響が見られた。教科面では、言語教科（国・英）は「ループリック」による質の定義が、理科は「概念マップ」

による構造化が、深い理解への鍵として機能した。経験面では、若手教員が「新たな視点の獲得」であったのに対し、中堅教員は既存の課題意識と理論が結合し、より自覚的で深い変容を示した。これは、教員の熟達度に応じた支援の有効性を示している。

4. 研究における成果と課題

本研究では、「逆向き設計」論に基づく「永続的理解」の言語化を支援するワークショップを開発し、その有効性を検証した。得られた成果と、そこから浮き彫りになった今後の課題について総括する。

本研究の最大の成果は、開発したワークが、教員の授業設計技術のみならず、内面的な授業観に対しても質的な変容をもたらす有効なツールであることを実証した点にある。

第一に、対象とした全教員が「永続的理解」の言語化に成功し、従来の教科書内容を消化する「コンテンツベース」の設計から、資質・能力の育成を起点とする「コンピテンシーベース」の設計へと転換を果たした。これにより、目標・評価・指導が一貫した論理的な単元構造の構築が可能となった。

第二に、教員の視座が「本時主義」から「単元主義」へと拡張されたことである。目の前の1時間の活動の成否に固執する近視眼的な視点から脱却し、単元全体を見通して学習をマネジメントする俯瞰的な視点を獲得したことは、教員の専門性開発において重要な示唆を与えるものである。

一方で、本研究には以下の課題も残された。

第一に、事例の限定性と一般化の課題である。本研究は意欲的な少数事例への質的分析に留まっており、より広範な教員層や異なる学校種における有効性の検証が求められる。

第二に、実践の自立性と再現性である。今回は開発者によるファシリテーションが介入しており、ワーク単独での効果や、介入者がいない環境下での再現性については未解明である。今後は、ファシリテーターに依存しないプログラムのパッケージ化が必要となる。

第三に、生徒の変容との相関である。教員の授業観・授業設計の変容が、実際の生徒の「深い学び」や資質・能力の向上にどのように結びついたかについて、実証的なデータを蓄積していくことが、今後の重要な探究課題である。

参考文献

- ・石井英真「『改訂版タキノミー』によるブルーム・タキノミーの再構築—知識と認知過程の二次元構成の検討を中心に—」（2002）
- ・石井英真「『改訂版タキノミー』における教育目標・評価論に関する一考察：パフォーマンス評価の位置づけを中心に」（2004）

- ・石井英真, 西岡加名恵, 草原和博, 阿部昇「課題研究Ⅲ「見方・考え方」をどう捉えるか カリキュラム研究」(2019)
- ・石井英真『よくわかる教育評価 第3版』(2021)
- ・ダイアン・ハート『パフォーマンス評価入門』(2012)
- ・奈須正裕「コンピテンシー・ベースの教育と教科内容研究への期待」(2023)
- ・奈須正裕「見方・考え方と高次の資質・能力を踏まえた個別の内容の選択・精選をめぐって」(2025)
- ・西岡加名恵「学力保障をめざすカリキュラムの設計―「逆向き設計」論からの提案―」(2008)
- ・西岡加名恵「ウィギンズとマクタイによる「逆向き設計」論の意義と課題」(2005)
- ・西岡加名恵, 永井正人, 前野正博, 田中容子『パフォーマンス評価で生徒の「資質・能力」を育てる』(2017)
- ・西岡加名恵, 奈須正裕, 川地亜弥子, 水上丈実「課題研究Ⅰ カリキュラム研究からみたアクティブ・ラーニングの検討」(2018)
- ・西岡加名恵, 石井英真『Q&A でよくわかる! 見方・考え方を育てるパフォーマンス評価』(2018)
- ・西岡加名恵, 石井英真『教科の「深い学び」を実現するパフォーマンス評価「見方・考え方」をどう育てるか』(2019)
- ・西岡加名恵『高等学校 教科と探究の新しい学習評価 観点別評価とパフォーマンス評価 実践事例集』(2020)
- ・西岡加名恵『よくわかる教育評価 第3版』(2021)
- ・西岡加名恵「実践力を育成するパフォーマンス評価」(2022)
- ・ベネッセ 『小中高校の学習指導に関する調査』(2023)
- ・文部科学省『教育課程企画特別部会 論点整理』(2025)
- ・文部科学省『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編』(2017年)
- ・G. ウィギンズ, J. マクタイ著/西岡加名恵訳『理解をもたらすカリキュラム設計―「逆向き設計」の理論』(2012)